

スポーツから考える 男女共同参画

筑波大学体育系教授 山口 香さん



山口香【やまぐち かおり】さん
1964年生まれ。東京都出身。筑波大学大学院
修了。1978年第一回全日本女子柔道体重別選
手権大会から10連覇を達成。1984年、世界女子
柔道選手権で日本女子初の金メダル獲得。198
8年ソウル五輪3位。日本女子柔道のパイオニア
的存在として活躍し、現役引退後は全日本女子強化
コーチ、全日本柔道連盟強化委員、監事などを歴
任した。現在、日本バレーボール協会理事、コナミ取
締役としても活躍中。筑波大学体育系教授、講道
館女子七段。

2月13日、令和3年度公開講演会を開
催しました。日本柔道界を牽引され、現
在は筑波大学で教鞭をとる傍ら、柔道だ
けでなくスポーツ全般の普及発展に努め
ておられる山口香さんに、『スポーツから
考える男女共同参画』についてお話を伺
いました。

東京2020 オリンピック・パラリンピック

コロナ下で開催された東京2020
オリンピック・パラリンピックは、開催
の意味や意義についてこれまでにな
く考えさせるものとなった。オリン
ピック・パラリンピックは世界的なス
ポーツの祭典ではあるが、サッカーや
ラグビーのW杯などと何が違うのだ
ろうか。

スポーツは社会を映す鏡

一方で、今大会の参加アスリート
の男女比はほぼ半々となった。189
6年にアテネで行われた第一回大会
において、女子選手の参加は禁止さ
れていたことを考えれば隔世の感が
ある。今大会は行われた全ての競技
において女子種目が採用され、参加
した国や地域からは少数であっても
女子選手が参加した。ここだけを見
ると、オリンピックやスポーツにおい
て男女平等は進んでいるかのよう
に映るが、役員やコーチの割合を見
ると、国によってばらつきはあるもの
のアスリートの半々とは未だ程遠い。ス
ポーツは社会を映す鏡だと表現され
ることがある。日本では女性が高等
教育を受ける比率は高く、成績も男
子に引けを取らない。しかし、社会に
出た途端に男女に格差が出るのはな
ぜだろうか。

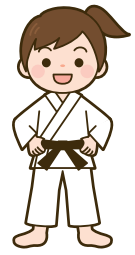
もちろん共通の部分もあるが、国
際オリンピック委員会（IOC）は、
「オリンピックの目的は、人間の尊厳
の保持に重きを置く平和な社会の推
進を目指すために、人類の調和のと
れた発展にスポーツを役立てること
である」と述べている。

開催の意義

私の解釈は、オリパラを開催する
意義は、この大会を通じて開催国の
人たちが世界の友好や平和を維持
していくため、持続可能な未来社会
を実現していくために何をすべきな
のかを一人ひとりが考え、行動変容
につながる、結果的に社会が変化し
ていくことなのではないかと考えてい



現役時代の試合写真（大学時代 山口香さん写真右）



女性アスリートの健康支援

男性と女性にはライフイベントに
大きな違いがある。どんなに科学技
術が進んでも妊娠・出産については女
性が担うしかない。また、共働きで
あっても女性が担う家事労働や育児
の比率は依然として高い。女性の活
躍が社会で求められているが、日本
社会において歴史的な背景や文化、
慣習などもあり、女性が仕事や社会
活動の他に担わなければならない部
分が多いため、なかなか状況が変わら
ない。女性アスリートは活躍している
のに、女性の指導者が活躍できない
理由の一つは、夜間の練習や長期の
合宿、遠征などと家庭との両立の困
難さにある。





女性アスリートの健康支援

女子選手を女性指導者が指導する必要はないと思うが、女子選手を育成・強化するためには女子の発育発達等の特徴をよく理解していなければならぬ。女子アスリートについての調査や研究は進んでいるので、そのような情報を得て、学ぶことは男性指導者でも可能である。しかし、毎月訪れる生理の煩わしさや痛みなどについては想像するしかない。これは一般の男女においても同じで、出産に立ち会ったからといってその痛みや大変さを共有することはできない。

物申さなければ伝わらない

私は6歳から柔道を始めて長く柔道という男性社会の中で生きてきた。今に至っての結論は、男性は決して悪気はなく、女性を差別しようとしていないわけではない、ということだ。にもかかわらず、多くの場面で私がそのように感じてきたのは、男性は生理的にも身体にも恐らく感じ方も女性と違う部分が多いので、私が何を求めているのかを理解できないことが多いからだろう。上意下達の柔道界で「お前は生意気だ。一言多い」と言われることが多々あるのだが、これには理由がある。男性にははっきり物申さなければ伝わらないことがほとんどなのだ。日本には忖度という文化があるが、男性の多くは女性に忖度しない。熟年離婚が増えているらしいが、離婚を切り出すのは女性が多く、突きつけられた男性は理由が

最大のライバルは最高の友

柔道もスポーツも究極の自己表現だと私は思っている。自分から技を仕掛ければ、いくら待っていても相手を倒すことはできない。技を仕掛ければ、相手が反応するので技が効いていたのかどうかもわかる。うまくいかなかった場合には次の一手を考える。社会生活も同じであるべきではないだろうか。相手を思いやる気持ちも大事だが、男女であったり、年齢が違ったり、外国人、障がい者という多様な人たちと共生していくためには、自分の思いや感じたこと、要望などは相手にぶつけた方がいい。スポーツがそうであるように、プレーしていくうちに相手を理解し、最大のライバルは最高の友になり得るのだ。

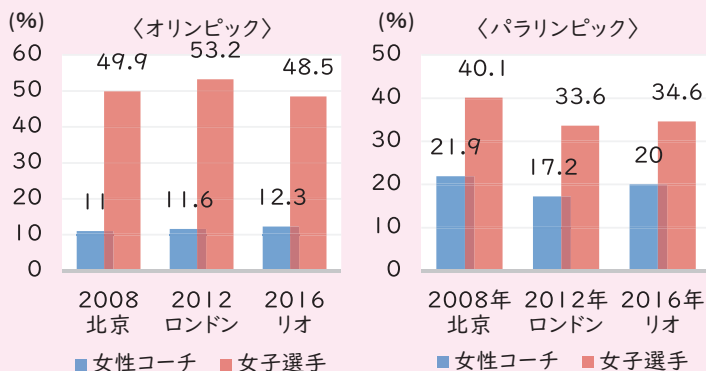
女性アスリートを巡る課題

キャリアと健康

選手はほぼ男女平等に参画できるようにになったのに対して、選手を支える指導者の男女比はほとんど改善されていません。2002年ロンドンオリンピックに出場した女子選手へのアンケートによると、4割以上のアスリートが「指導者になりたい」と回答しており、コーチをいう立場に対する女性アスリートの高いモチベーションがうかがえる結果となっています。一方で、女性コーチ育成の課題について、JSCが平成28年と29年に競技団体の強化責任者に行ったアンケートによると、指導する環境や機会が十分でないこと、子育て等との両立が困難であること、セミナーへの参加や資格取得などの学びの機会が不足していることが指摘されています。

女性アスリートについては、無月経や疲労骨折などの女性特有の課題や、妊娠・出産等のライフイベントによる競技スポーツからの離脱も課題

夏季オリンピック・パラリンピック3大会における女性コーチの割合



(出典:内閣府男女共同参画局「男女共同参画白書 平成30年度版」)

となつていきます。女性アスリートの健康問題は生涯に渡って身体に影響が生じることもあるため、正しい知識を得る機会と気軽に相談できる環境が求められています。



2015年大邱ユニバーシアードでの1枚

思い当たらないケースがほとんどだという。女性には言わないだけで長年積もり積もった理由が山ほどあるのに、男性には心当たりがない。

